

## 地政学リスク上昇でも上がらない原油価格

### ◆2019年前半の原油価格は、18年より低水準

2019年6月以降、中東のホルムズ海峡での緊張が高まっているが、原油価格は上がっていない。世界の原油価格の代表的指標であるWTI原油先物価格をみても、18年平均は1バレル68ドルであったが、8月は60ドルを割り込んでいる。その背景には、19年は原油は供給過剰の傾向になるという予測がある。

### ◆OPECプラスは減産だが、北米は増産継続

7月、OPECプラス（OPEC加盟国およびOPECに同調するロシア、メキシコなど非OPEC加盟国）は、原油価格の回復を狙って17年以降行ってきた協調減産を20年3月まで延長することで合意した。EIA（米国エネルギー情報局）によると、19年のOPECの原油収入は、輸出量が減っても、現価格水準なら年平均1バレル43ドル（WTI価格）だった16年に比べると、約30%増収の見込みだ。

OPECプラスの産油量は世界の約60%を占めるが、他産油国の増産で総供給量は増えている。特に生産シェアの約15%を占める世界第1産油国の米国の伸びは大きく、18年は前年比17%増産した。19年第2四半期はペースは落ちたものの、今後も増産は続く予測だ。6月のダラス連邦準備銀行の調査結果によると、19年度末予測価格（WTI）は1バレル57ドルであり、米国のシェールオイル新規油井採掘の損益分岐点である1バレル50ドルを上回っている。

### ◆世界の原油需要減で原油在庫増加の可能性

7月のOECD諸国の商業用石油（原油、石油精製品）在庫は、前年および過去5年平均の7月値を上回った。世界経済成長の減速に伴い、OPEC、IEA（国際エネルギー機関）ともに、19年は需要の伸びは鈍化と予測している。世界第1、第2原油消費国である米国と中国は、6月までの消費は堅調であったが、貿易摩擦の影響で先行き不透明である。第3消費国のインドはガソリン需要が堅調であるにもかかわらず6月は前年を下回った。インドは4～7月の自動車販売量は前年比31%減となっており、今後ガソリン需要も減少に転じる可能性がある。 【石井由紀】